

Title	コモンセンスの自由主義：議会政治危機の時代の馬場恒吾
Author(s)	吉田, 博司
Citation	聖学院大学論叢, 4(1): タテ 27-タテ 42
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=760
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

自由主義のコンセンソス

—— 議院政治危機の時代の馬場恒吾 ——

吉田博司

一、はじめに

馬場恒吾（一八七五〔明治八〕—一九五六〔昭和三一〕年）は、近代日本の忘れられた自由主義者であらう。⁽¹⁾ 馬場は昭和初期から一〇年代にかけて、政界人物評論で人気を博し、洛陽の紙価を高めたジャーナリストであった。⁽²⁾ 馬場の人物評論には「馥郁」たる香りがあると評されるが、それは豊かな情報と人物への中庸的態度が醸すのであらう。⁽³⁾ しかし、精神的にみた馬場の本領は、その政治評論における一貫した自由主義の姿勢にあると思う。政党政治の黄金期にはその弊害を厳しく指摘していた馬場は、五・一五事件以降議院政治が軍部の圧力により危機に面すと、政党政治復活をうったえ、挙国一致内閣の虚妄性を鋭く批判した。いずれも国民が政治の主人公であるという議会主義の常識的観点からの評論であるが、とくに挙国一致内閣時代の議会政治擁護論は同時代批判の白眉といえるものである。

昭和一〇年頃の馬場の大衆の人気とその理由について、青野季吉は

次のように観察している。

「馬場恒吾は、いまジャーナリズムの舞台で、時代の人気者の一人だ。このファッショ的な空気のなかで、馬場のリベリズムが光るといふことは、それだけでも時代の曇天にくさくさした気持を和らげてくれるが、じつはその時代の曇天が、馬場のリベリズムを光らせるのだと考へると妙なものである。

或る新聞社の当事者の話によると、馬場の自由主義的な政治論や時局観ほど、読者によるこぼれるものはないと云ふ。その理由は誰にもすぐ分る。馬場の評論は、常識的で、平易で、具体的で、もって廻つたところや、近代のインテリ臭い疑惑などは混つておらず、応接間でも、サロンでも、炉辺でも、街頭でも、どこでも通用する評論だからだ。それに彼の平俗で、暢達した、肩のこらない、一種の名文でない名文がある。これでは議院政治家から、下は床屋政談の連中までの人気を博さないとしたら、それこそどうかしてゐる」⁽⁴⁾。

馬場は、近代日本の代表的自由主義者である吉野作造、河合榮二郎、美濃部達吉のようなアカデミックで理論的な思想・哲学を有してはいなかった。それは、「或一国内に於ける最も大なる知恵は何かと云へば、其国内に居る凡べての人間の知恵を集めたものがそれである⁽⁵⁾」というように、民衆のコモンセンスをバックボーンとする「布衣」の自由主義であった。馬場はこの立場から、議会政治と自由さらには平和を軍部・官僚・ファッショ勢力から守ろうとしたのである。

この論稿は、議会政治凋落の歴史的潮流にコモンセンスの自由主義をもつて抗した馬場の政治評論を考察したものである。筆者はこれまでに、近代日本の政治精神の問題を国家主義思想に焦点をあてて考察してきたが、馬場論はその反対側すなわち自由主義の精神からの検討とすることになる。近代日本の稀にも強靱な開かれた精神が忘れられないように。

二、憲政常道時代の評論

大正一三年、清浦特権内閣打倒と政党政治の確立、普選制定を唱えた第二次憲政擁護運動は、護憲三派内閣を誕生させ、政党内閣を常道とするいわゆる憲政常道時代に道を拓いた。普選法もこの内閣の下に実現された。

昭和二年までには、既成の保守四党であった政友会、憲政会、政友本党、革新倶楽部は二大政党に収束し、天下政友会に非ざれば民政

といわれる政党の黄金期を現出した。反面、政党の確執と疑獄の問題は醜状を呈すほどのものとなり、経済困難と大陸問題への対応能力の頼りなさど相まって、政党政治への不信感も昂まっていく。

馬場のこの時期の評論は、驕れる保守政党の体質的欠陥を問題にしている。莫大な政治資金、金のかかる選挙、政權至上主義がその主なるテーマであった。大正八年以来、自ら普選運動の陣頭に立ち、改造を唱えてきた馬場にとって、普選が泥にまみれるのは忍びがたかったのかもしれない⁽⁶⁾。まず政治資金問題から見ていこう。

「政党首領の行く途には多くの陥穽がある。其陥穽に落ちれば再び浮び上る事は出来ず、それを避けて通れば首領たる地位を踏み外す。過去の政党首領が政党首領としては大抵悲惨な末路を遂げた事実が其動かすべからざる証拠として残っている。

其陥穽は党費を作る義務である。数百万円に上る総選挙資金は天から降らず、地から湧かず。そして絶対絶命それを作らねばならぬと云ふ場合、党首は一身を犠牲にして後暗い事をするか、然らざれば逃出すか二つの方法しかない。何れを選ぶにしても其末路を悲惨なる運命に決定する⁽⁷⁾」。

昭和二年六月一日結成された立憲民政党の総裁浜口雄幸の門出に、

馬場はこのような危惧を表明した。時は田中政友会内閣時代であり、翌年初の普通選挙が予想されていた状況で、浜口総裁の対処に馬場は

注目していたのである。馬場が頭に描いていた政党首領の末路は、政治資金のために惹き起した疑獄やその疑惑のなかで非業の死を遂げた星亨、原敬の最後であり、政治資金を拵らえられず首領の地位を去った板垣退助、高橋是清、犬養毅等の姿であった。⁽⁸⁾ 浜口はこの陥穽を乗り切れるかを馬場は問うたのである。

しかし、政党首領の悲惨な末路というだけでは個人的な関心事、したがって人物評論の話題にすぎない。馬場は、莫大な政治資金の問題の一つは、それが日本の一般民衆に「これは我等の政治にあらず」という疎外感を抱かせてしまうことにあるとみていた。それゆえ「既成政党が将来に生き残らんと欲するならば、彼等が選挙に際して莫大な政治資金を振り蒔く事は絶対に止めなければならぬ」と馬場は言う。⁽⁹⁾ 事は政治不信の問題だった。

馬場は一方で、莫大な政治資金の問題を「政治上の資本主義」として次のように批判した。

「何の政党首領も首領となつてゐる為めに、従つて政権を取る為めに、莫大な資本金を作らねばならぬと云ふ事実が、現在の政治は搾取の上立つと云ふ特長を付ける。二百万、若しくは三百万と云ふ金は如何なる形に於てか不当な搾取をするか、或は搾取した金の上前をはねるかでなければ出来るものでない。其金がなければ政党も存在せず、政党首領も存在せず、政党内閣も存在しないと云ふ所の、争ふべからざる事実を認める以上は、現在の政治は搾取を基礎として立つと云ふ断

定を認めざるを得ぬ。搾取の上に立つ政治が不合理である事は云ふ迄もない。……此政治上の資本主義は経済上の資本主義と同じく何日かは自然に崩壊すべき要素を其素質の中に含んでゐると云つてもよい」。⁽¹⁰⁾

搾取の上に立つ政治上の資本主義という批判は、多分にマルクス主義者の口吻を思わせる。馬場は当時、社会民主主義の旗幟を鮮明にしていた。大正一五年一二月の社会民衆党結成時には顧問として加わっていた。⁽¹¹⁾ 既成政党をブルジョア政党視し、安部磯雄や大山郁夫の無産党内閣誕生に思いを馳せてもいた。⁽¹²⁾ 経済的な自由主義者ではなかつたのである。しかし、馬場はマルクス主義の決定論になじむことはなかつた。馬場は、人間性を唯物論的決定論の奴隷にするにはあまりに人間に寛大であつたといえる。

浜口の可能性への問いにもどつてみよう。馬場は、金なしの選挙を標榜する浜口総裁の人間性に、「正直」「奮闘努力」「強い意志」を見出す。問題は浜口が自己主張をするとき、党員が彼を「頼み甲斐のある首領」と言うか否かだという。政治家は「政治資金を党首に集めさせ、それを搾つて運動費と生活費に当てんとする」からである。しかし、馬場は、浜口は理想に忠実であろうと言い、「党員が下手な小細工をして、総裁の理想を没却しない事を希望する」という道徳論を結論とした。⁽¹³⁾

馬場のこの評論は、決定論を免れるというリベラリズムの基調に立っているが、もう一つ鋭さに欠ける憾みがある。それは制度論的視点

の欠如によるものと思われる。政治資金問題は、政治家の道徳・倫理問題以上に法的規制の対象であるべきだからである。人物論的政治評論の弱点といえよう。

政治資金問題を制度論的にあつかうには、政治資金の公的必要性を是認することが前提となる。馬場は、莫大な政治資金を搾取として認めない主張をしていた一方、その主張を緩和し、あるいは打消す考え方もしていた。すなわち、きれいな政治資金の可能性と政治資金の公的必要性を認めていたのである。

「既成政党と無産政党とを問はず、苟くも政党人となつてゐるものは共通の煩悶がある。それは政党資金を如何にして作るかと云ふ事である。政治運動には金を必要とする。其金の拵へ方が公明正大でなければ、其政党人は没落する。而して公明正大なる金の出所がさう沢山あるものでない。茲に政党人の煩悶が始まる。」

民政党総務安達謙蔵氏は代表的な政党人である。彼れが政治運動に参加して四十年になる。然るに彼れは今尚政党人として没落しないのみならず、一度は内閣に列し、今後益々發展するらしい。清貧に安んずる事は、彼れでなくしても出来る人はある。清貧にして、而して尚能く活発な政治的活動を続け得る者は、現代の社会状態に於て診とすに足る。其所には既成政党の党人にとってのみならず、無産政党の陣営に於ても、参考とすべきものがある。⁽¹⁴⁾

このように政治資金の必要性と正当性が認められるばかりか、「清貧」に甘んずる既成政治家の存在も認知されている。馬場は一般論では既成政治家をブルジョア呼ばわりしたが、個別的には決定論的言いはしなかつた。

馬場はここでも、安達の個人的手腕に政治資金問題の光明を見出すに止まり、制度論的解決の方向に踏み込まなかつた。人物評論の弱点といったが、近代政党組織がまだ未熟であり、経済社会が積極的かつ合理的な政党支援のパイプを形成していなかつた時代であつたことを考慮せねばならない。もつとも馬場は、他のところで、既成政党の財閥依存から「党費徴収」の市民政党への脱皮の道を提言してはいる。⁽¹⁵⁾莫大な政治資金の問題は、金のかかる選挙の生みだす問題でもある。馬場のこれに対する批判の一は、議会在が完全な国民代表の場とならな

いというものである。

「今の議会在に代議士を出すには相当の金が入用である。例えば或選挙区に於て、其土地の人々が甲と云ふ人を代議士にして出し度いと思ふ。すると、其人に代議士の選挙運動をさせて当選させなければならぬ。其選挙運動が今日の実例から見れば、候補者一人の平均が五万円前後になつてゐる。尤も今の法律で言えば五万円などと言ふ大金は費つてはいけない事になつてゐる。……」

先ず仮りにこうした選挙違反はないものとする。候補者は二千万の保証金と一万二千円の運動費があれば選挙に臨めるものとする（無産

政党の候補者は大抵此範囲内の金で済ましてゐる。其場合に於てすら一万四千円の金は用意せねばならぬ。然るに今の社会状態に於て、国民の大多数は無産階級である。……それらの者が集まって自分等の好む代議士を選出する為めに、一時に一万四千円程度の運動費を捻出すと言ふ事は容易でない。……

だから、代議士たらんと欲するものは自分で其運動費を工面する。或は先輩の処から借りて来る。或は自分の懐から出す。何れにしても政治運動に金を出し得るものはブルジョアである。そして、金に伴つて、ブルジョアの政治的意見が其代議士を支配する。それが世間普通の常識的な、而して習慣的な確定事実となつてゐる。其結果として、代議士は選挙民の投票に依つて選挙されるけれども、其政治の意見は己にブルジョアに売れてゐる⁽¹⁶⁾。

昭和三年二月の総選挙（最初の普通選挙）において、無産諸派が八名の当選者をだしたにすぎなかつたことは骨身にしみたようである。前年の府県会議員選挙を「普選前衛戦」として重要視したときも、馬場は無産政党の悲観の理由は金の問題だと分析していた⁽¹⁷⁾。

しかし、馬場のコモンセンスは、金のかかる選挙による議会政治の限界を批判しても、それを理由に議会主義を否認する極端な立場に同調することは拒否した。共産党専制もファッショ専制も排し、社会民主主義を主張したのである。

「例へそれが、共産党専制であらうが、ファシスト専制であらうが、苟くも専制と名の付くものは、人民が或程度の政治的訓練を経た後には、其人民に対する桎梏となる。人民の中から湧き出する力を圧へる。其発達を妨げる。従つてこれだけ理想社会への到達を遅くする。

民主主義制度の特徴はそれが順調に運用されて居れば人民の進歩発達が自動的に政治と経済に反映するのである。それが専制政治である場合には、兎に角一度其専制政治を変革しなければ、人民の意思を政治と経済に反映さす事は出来ないが、民主主義的政治ならば、其変革を待つ迄もなく、議員の選挙、其也の合法的手段を通して、人民の意志を政治と経済に行ふ事が出来る⁽¹⁸⁾。

金のかかる選挙がブルジョア支配をもたらすという決定論的批判にもかかわらず、馬場が議会制民主主義を棄てなかつたのは、専制と名の付くものが人民の力を抑えるという、自由主義の基本的立場からの専制への敵意と、民主主義の順調な運用への希望があつたからである。金のかかる選挙にも改革の余地はがあると馬場は考えていた。「選挙国営」がその一つである。

「先ず現在の選挙区を標準として考へる。其所に候補者とならんとするもの百人ありとすれば、各候補者に五ページ程度の政見を書かしめ、それを全部纏めて一冊の書物に印刷して有権者全部に配布する。一冊三十銭、有権者十万人として三万円、全国を百の選挙区に分つとして

三百万円。

百人の候補者を政府の費用で、各小学校、公会堂などに引廻して演説さす。候補者以外には演説せしめぬ。其日割、振り当ては、寄席の組合が寄席の芸人を各寄席に過不足なく分配するやうに、分配する。こゝする費用は一選挙区二万円、全国二百万円。

合計五百万円で衆議院選挙が出来る、安いものだ。

選挙中は候補者は裁判所の陪審官の如く謹詰にして、以上の外の運動を一切なさしめない。陪審官は被告を判決するのだが此場合には国民が候補者を判決する事にする⁽¹⁹⁾。

自由主義者の選挙改革論としては、いささか窮屈な内容であり、問題もありそうであるが（後に挙国一致内閣の下に選挙粛正の名目で国家統制色が強まると、馬場は「選挙公営」は選挙粛正の目的を果たす反面、選挙を「熱の上らないものにし、人民の力が自由に伸びるのを妨げる」と自由主義者としての面目を発揮する批判をする⁽²⁰⁾）、選挙制度を否定の対象としていないことは確かである。

そもそも馬場は、選挙に金がかかり、国民代表選出の制度として問題があると考えていたものの、まったく代表機能を失っているとは見えていなかった。選挙に投票買収が伴い、これが金のかかる選挙の一大要因だとみなしてはいたものの、都会は田舎と比べ買収は減り⁽²¹⁾、「宗派的に固まっている選挙民」は買収できない、また浮動投票には金で動かない「純真な点」があるとも言っている⁽²²⁾。

内閣の人氣、政策の善悪其他の表看板も選挙の力だと認めている⁽²³⁾。

これらの現実認識も手伝って、「金のかかる選挙」論は、議會制否認にいたるような決定論（ブルジョア議説）に陥らなかつたのである。のちに政党排撃の聲が高まる時代には、馬場は選挙腐敗の責を政党よりむしろ国民の意識に帰して、その改革を促すことに力点を置くようになる。

最後に、政党の権力至上主義への批判の一斑を見てみよう。

馬場は、昭和二年の民政党結成が面白くなかつた。「不評判の間屋と云ふべき政友本党」との合同は、憲政会にとり「愚策の最も愚なるもの」と酷評した⁽²⁴⁾。片や清浦特権内閣支持のため政友会を割つて出来た政友本党と、憲政擁護を掲げてそれと闘つた憲政会の合同劇の理由を、馬場は次のように探る。

「それならば、真の理由は何所に求むべきかと云へば、吾々は其所に凡ての既成政党を通じて存在する政権獲得意識なるものを発見する。其意識とは政党は如何なる手段を以ても政権を取らねばならぬ。取つた政権は如何なる事があつても手放してはならぬと云ふ熾烈な政権欲である。此野心がなければ、或は其野心を実現する事が出来ない時は、政党は生長することが出来ないと云ふ現実の事実である。此野心あるがために政治家の勇氣が生れる。勇氣とは綱紀紊乱でも何んでも関^マらず、幾百万かの金を作ると云ふ覚悟である。此勇氣を比較的に多量に有していた政友会は原敬時代の大をなし、其勇氣の比較的少なかつた

革新倶楽部は、犬養毅氏の如く政友会に併合せられるに至った。⁽²⁵⁾

政権獲得のための無節操な政党の行動として合同を批判したわけである。政党は政権を握っているか否とに関わらず、同じく国家と国民のために尽くすべき使命を有していることを知らない、と馬場はいう。⁽²⁶⁾

馬場は政党の政権至上主義の土壌に政治家の英雄主義や権力愛を見ている。馬場は「元来英雄豪傑といふものがあまり好きでない」⁽²⁷⁾。合同劇の一方の主人公、政友本党の床次竹二郎に対しては政界の「夢遊病者」の名を奉り、「総理大臣になる為めには、人間としての他の凡ての美德を蹂躪してもかまはぬかの如く振舞ふ」と厳しい人物評価を下している。⁽²⁸⁾

また、田中義一政友会内閣の無責任な政権居坐りぶりを狙上におくなかでは、その原因を「堂々天下の権を握って居る」ことだけを目的とする田中の権力愛に帰している。⁽²⁹⁾

馬場は日本の政治風土に官尊民卑の封建的遺風が根強く残っていることが問題だとみていたのである。

三、挙国一致内閣時代の評論

憲政常道時代は長く続かなかつた。昭和二年春、馬場は朴烈問題で揺れ、三党首会談で泥試合に幕を降ろした第五二議會をふりかえって、「今年ほど議會が露骨に世間から見放された事はなかつた」とし、そ

の理由は「今の政党が愛想を盡かされてゐるから」だと感想を述べている。⁽³⁰⁾馬場が指摘したような権力至上主義が数々の泥試合を議會に展開し、互いに足のひっぱり合いをするうちに政党は国民的信用を自ら脆弱なものにしていったことは否めない。

時代はしかも、政党の統治能力が負い切れないほどの問題を集積していた。世界恐慌に追い打ちをかけられた経済破綻、農村問題をはじめとする日本社会の分解（共同体喪失）、中国ナショナリズム台頭による大陸権益の危殆と満州問題、これをめぐる国際外交の深刻化と軍縮問題の重畳。これらは相乗的に国家危機の雰囲気を拡散し、現状打破（昭和維新、国家改造をスローガンとした）を唱える軍部、民間の革新勢力に台頭のチャンスを与えた。そのうねりは昭和六年九月の満州事変前後から大きなものとなり（三月事件、十月事件）、昭和七年血盟団事件、五・一五事件をひきおこした。五・一五事件は犬養政友会内閣を倒壊させただけでなく、二大政党対立による憲政運用に終止符を打つ決定的事件となつた。

軍部の暴力再発の危惧は、政党内閣の継続の選択肢を元老、重臣に諦めさせ、政党を沈黙せしめた。⁽³¹⁾非常時の名の下に海軍大将斎藤実を首班とする挙国一致内閣が組織され、この趣旨の内閣がしばらく継続する。その間非常時は戦時となり、軍部が政治の主導権を強めていく一方、政党勢力は凋落の道をたどる。

馬場のこの時期の評論は、議會政治がなしくずしに無力化されていく歴史過程をはつきり見据えていた。馬場の自由主義者としてのコモ

ンセンスは、議会政治が軍部と右翼の暴力と威嚇により否定されるといふ危機に際し、かつての既成政党批判のトーンを落し、むしろ既成の政党と政治家を鼓舞する主張を展開した。議会政治、政党政治は批判と改革の対象としても、決して否定の対象としないという議会主義リベラリストの本領を見事に發揮したのである。

馬場は、憲政常道からの逸脱である挙国一致内閣のイデオロギー的潮流を、五・一五事件以前にさかのぼって、安達謙蔵の協力内閣論を組上においた。内相安達は満州事変勃発後、政民協力を唱えて我党内閣であった若槻民政党内閣を総辞職に追いこんでしまった。

「挙国一致内閣又は協力内閣に賛成する者は口癖のやうに云ふ、此国難を突破するには単独内閣ではいけないと。特別に今日の国難とは何を指して云ふのか明瞭でないが、単独内閣の力が弱くして、協力内閣の力が強いと思ふものは、挙国一致内閣が強いと信じた人間と同じ誤謬に陥っている。米国に対する野球戦を見たものには、各大学連合チームの頼りなさがしみじみ判る。早稲田とか慶應とか云ふ如き、平生は敵同志の選手を組合せた所で、チーム・ワークがシッカリ行かない。衆議院に絶対多数を占め、地方選挙に大勝を博した民政党内閣である。それが力足らずとして、何が力足るのであらう。……」

安達が惧れる所は、議会で泥試合をやっていると議会否認の声が高まり、終に議会政治を滅ぼすと云ふことにある。吾々はこれを杞憂だと思はず、又此心配の基礎が薄弱だとも思はない。併しそれを

避けるために協力内閣を主張したのは間違つてゐると思ふ。何となれば議会政治の一番大事な所は、只形式的に議員が集る習慣を残して置くことでなく、又実質的に所謂善政が行はれ得ると云ふ事でもない。中心の要点は政治が国民の自由討議の結果として行はれると云ふ所の、其微妙な空気を保存する所にある。形式的に議会が開かれてゐると云ふ丈けならば、ファッショの伊太利でも開かれてゐる。併し其所の生ける屍となつた議会は、最早議会政治を存続せしめてはゐない。……政党が対立して自由討議の過程を踏むことに依つて政治は人民のものとなつてゐる。それを取り上げれば、議事堂は存続しても、議会政治は亡んでゐるのだ。⁽³²⁾」

挙国一致内閣はいわれるような強力な政治ではないという論点は、齊藤内閣から岡田内閣へと挙国一致を標榜する内閣が続く閉塞的政治状況の中で、馬場がくりかえし説いたところである。この評論の真骨頂はしかし、議会政治の本質を政党の対立を基盤にした自由討議に求めているところにある。協力内閣あるいは挙国一致内閣はそのアンチテーゼだから議会政治に反するという指摘である。政党の対立が不毛な政権争奪劇と泥試合に終止し、国民や軍部の非難的となつていたときに、政党の対立の意義を強調することはそう簡単なことではなく、また勇気を要することであつた。安達のような党人でさえ協力内閣を唱え、後の政民提携運動にも見られるようにそのようなイデオロギー的潮流が党人の少なからぬ範囲に拡がっていった時代であつたのであ

(33) 全体性の神話は近代日本を通じてその政治精神を呪縛していたといえる。

馬場は齊藤内閣成立のいきさつを次のように考察する。

「其時分から西園寺の考へてゐたらしいことは齊藤内閣の使命とでも云ふことである。其使命として常識的に考えられてゐたことは、齊藤内閣は政党の単独内閣でない事に依つて、政党政治を排撃する軍部の尖鋭分子を緩和するであらう事であつた。当時の險悪なる社会不安の空気を鎮めるためには、此使命も考慮されたであらう。だが、其当時からして西園寺の腹には同時に齊藤内閣をして政党を反省せしめる役を勤めさせし意図があつたと思はれる。五・一五事件の後、齊藤内閣と云ふ挙国一致内閣が出来て、政党単独内閣が出来なかつた事実のみに對しても、政党政治家中の心あるものは、多くの反省すべき理由を發見したであらう。其反省の現はれは己に選挙の廓清、党弊の打破などと云ふ叫びの挙つたことに出てゐる。だが西園寺の腹を推測すれば、此政党の反省を強要する為めには、齊藤内閣をして、衆院を解散せしめ、政府の干渉なき大つピラの買収なき選挙を行はしめる。それをしなければ齊藤内閣を組織した意義がないと云ふのである」(34)。

馬場は一面において齊藤内閣の意義を認めていた。それは軍部の尖鋭分子をなだめ、事態の鎮静化をはかるということである。馬場は「田満居士」齊藤にファッショへの「防波堤」という役割を期待した。(35)

ファッショの波が引くまでは、政党もこの意味において齊藤内閣に協力すべきだという主張はここから生まれる。

また、政権亡者の政党に反省をもたらすこと、また、そのための総選挙実施という役割である。

しかし、馬場は議会議主義者の原則を緩めなかつた。齊藤内閣は「それ自身がファッショ内閣の一種と云へる」と厳しい評価をした。

「総べてのブルジョア内閣はファッショであると云ふ意味でのファッショであると云ふ意味ではなく、議院政治の機能を大部分中止してゐると云ふ意味でのファッショである。議院政治の機能は何であるかは今更説明する迄もない。総べての政治問題を議場にて討論する。其討論が政党と政党との間に闘はされる。さうしてゐる中に一般の与論が起り、政府は国民大衆の賛成する政策を行ふ事になるのである。然るに齊藤内閣は二大政党から大臣を容れてゐるが故に、議会で行はるべき筈の討論が、閣議の密閉された室内で行われる。万機公論に決すると云ふのが、万機秘密会議で決すと云ふ事になる。従つて自由討論の結果として与論が起らず、国民大衆は何が何やら判らずに、政府の政策を後援しなければならぬ。……だからファッショは己に来てゐる……西園寺が齊藤内閣を推薦したのはファッショに對する一部の讓歩たること勿論である」(36)。

馬場の議会議主義原則からする挙国一致内閣批判は、時の経過とともに

に強まっていった。昭和一〇年（昭和九年七月から岡田内閣）に入る
と「挙国一致内閣の清算」を呼びかけ、「政党復興」を促すにいたる。⁽³⁷⁾
総選挙論も政党粛清の意義ではなく、政党の「捲土重来」のためとい
う積極的意義が付されるようになる。⁽³⁸⁾

馬場がこうした議会政治論に固執したのは、斎藤内閣の外相内田康
哉が満州問題で「焦土外交」を表明したような（昭和七年八月）、日
本の将来の方向が危ぶまれる歴史状況において、政党対立と言論の自
由による政治的理性が、時流という同調作用に押し流されることを懸
念したからでもある。

「唯理論的に云へば挙国一致内閣と言ふのは此抗毒素否定の政治組織
である。政府与党と反対党があるのでなくして、凡べての政党が一応
は政府与党であるが故に、だれか一人、或説を唱へると、他の総ての
人がそれに賛成する。夫が唱へて女房が和すると云ふ所の一家円満の
相を全国に応用せんとするものである。全国円満は誠に結構であるけ
れども、全国が枕を並べて餓死すると云ふ所迄行けば、円満必ずしも
歓迎すべきでない」。⁽³⁹⁾

馬場は政党に「抗毒素」の役割を期待した。しかし、第六四議会で
は、政友会、民政党ともに「強硬外交に頌徳表を奉って居る」有様で
あった。⁽⁴⁰⁾ 日本は昭和八年三月、国際連盟を脱退し、孤立化への道を歩
むことになる。挙国一致内閣の実際の成績は、国策が「千遍一律に強

硬派の爲めに引摺られるのみであった」のであった。⁽⁴¹⁾

斎藤内閣は非常時を解消できないまま、帝人事件で総辞職をした。
挙国一致内閣は海軍大将岡田啓介に引き継がれることになった（たゞ
し政友会は入閣援助を拒否）。馬場の岡田内閣への評価は、基本的な
ところではほとんど斎藤内閣へのそれと変わらなかった。その役割はや
はり非常時の解消（軍部の尖鋭分子を抑えること）、議会政治復活の
地ならしとしての総選挙実施だともみる。ただし、総選挙の意義を選挙
粛正よりは、解散総選挙によって「政党の闘志を奮ひ起す」ことに求
めた。⁽⁴²⁾ 国民の支持をバネにファッショ克服をはかれというのである。

また、一九三五年のロンドン軍縮会議を国際協調の方向で乗り切る
ことも期待された。⁽⁴³⁾ 馬場は岡田を斎藤同様、昭和五年のロンドン海軍
軍縮条約締結に協力した議会政治の理解者であり、したがって軍部・
民間の尖鋭分子（ファッショ勢力）が排撃の対象とする現状維持派と
見なしていた。

馬場はこの意味において、政党ことに政友会の岡田内閣への協力的
態度を説いた。政友会がかつてロンドン条約の統帥権干犯問題で、浜
口内閣を軍部の条約反対派と一緒に糾弾したことを、外交問題を政争
の具に供すものと馬場は批判していたからである。⁽⁴⁴⁾ しかし政友会は昭
和一〇年、右翼・軍部を中心とする天皇機関説排撃（団体明徴運動）
に積極的に加担し、岡田内閣を動揺させた。「政友会が政権を取らん
とする欲求に駆られて、ファッショ的勢力と握手しないであらうか」
という馬場の危惧は不幸にも現実のものとなった。⁽⁴⁵⁾ 政友会のこの行為

を「政党政治の自殺になるような言論に耽った」と馬場は厳しくたしなめた。⁽⁴⁶⁾

また、在満機構改革問題で、岡田内閣が陸軍に押し切られる形で文民支配を後退せざるをえなかったことに対しては、政民両党が全力を挙げて岡田に協力しなかったからだとして批判している。⁽⁴⁷⁾

一方、議会主義者の原則論からする挙国一致内閣（実際には政友会を欠いた名目だけのものであったが）への不満はますます募った。

「現在の岡田内閣と在野政党との争ひは、内閣組織の原則の所に存在する。これは政友会ばかりでなく、民政党にも適用出来ることであるが、政党の伝統的の主張は政党内閣の樹立である。かれらが人民を代表して人民の意思を政治に暢達せしめるといふ使命を帯びてゐる以上、かうした主張をもつのは当然である。そして今の岡田内閣、前の齋藤内閣はかうした政党の主張に反対して作られた内閣であった。名は挙国一致内閣であるけれども、実は官僚内閣である。官僚内閣と政党との間には超ゆべからざる大なる溝がある。この溝を隔てて争へば、政府と政党とは何時でも決戦する理由があるのである。ただ遺憾なのは政党がこの決戦理由をばかしてゐることである。かれらは未だ会で、議場においてもその他の場所においても、われらはこの内閣を潰して我党内閣を作るのだと叫んだことがない。恰も五・一五事件に腰を抜かして政党员得意の大言壮語をする勇氣すらなくなったかの如く見える。

いわゆる日本の非常時なるものは己に約五年継続した。その間における国家の大事はそれが善いにしても悪いにしても悉く人民とは相談なしに行はれた。その相談を要求すべき政党もおとなく沈黙を守つて今日に致つたのである。隠忍五年人民は漸くしびれを切らして来た。非常時が稍や変形して人民は人民の意志が無視された状態に満腔の鬱憤を感じつつある。かうした情勢を見れば最早日本にも人民を代表する政党政治が復活してもよい時機である。少くとも政党は政権を与へよと叫ぶべき時機である。それをささ言ひ得ない政党に人民は投票する張り合ひもないではないか。⁽⁴⁸⁾

馬場はかうした立場から、政友会（主流幹部派）の反岡田の態度を擁護し、それが政権欲以外の何物でなくとも、そうした行動が「結局超然内閣否認、政党内閣樹立の運動になつて、日本の民間政治家が過去半世紀に亘つて闘い來つた伝統を守る事になる」と論じた。⁽⁴⁹⁾ 逆に政友会の妥協派の「政党は須らく党派の区別を忘れて、挙国一致的に内閣を助けて、国家を安全の地位に置かねばならぬ」という言い分に對しては、「岡田内閣を助けることが非常時局に善処することになるか否か」と否定的見解を示した。⁽⁵⁰⁾

増大する軍事予算、広義国防の提唱（陸軍パンフレット）、内閣審議会・内閣調査局の設置等は、岡田内閣下で着実に軍部・官僚勢力が台頭し、議会勢力が衰弱化していることを示すものと馬場は見ていた。⁽⁵¹⁾ 政党政治復権の要求はこうしてそのトーンを高めていった。

挙国一致内閣（官僚・中間内閣）による非常時の解消と議会政治再生という馬場の歴史予定図は、昭和十一年の二・二六事件でまた遠のいてしまった。続く広田弘毅内閣が組閣当初から軍部にいたく干渉され、軍部大臣現役制を復活させたことに象徴されたように、軍部の政治的主導権は強化されていった。⁽⁵²⁾

昭和十二年七月の蘆溝橋事件は非常時に転換し、官僚・中間内閣が打ち続く末、政党は自ら解党の道を急ぎ、「新体制」さらには「大政翼賛会」になだれ込んでいった。

馬場はこの間も、議会政治の原則的立場から、官僚・中間内閣の不毛性と虚偽性を鋭く批判し続けた。

「国民から遊離してゐるがために無力であった内閣は、近衛、平沼、阿部の三内閣ばかりではない。その前の斎藤、岡田、広田、林と云ふ一連の官僚内閣皆然りであった。

……阿部内閣は弱体内閣だと云はれた。併し官僚内閣で弱体ならざるものが在り得るか。政治は国民の支持なくして行はれるものでない。その支持と云ふのも、唯生温い賛成の声援を送るだけの支持ならば何程の効果もない。国民がこれは我党内閣である。この内閣に反対するものはその内閣を支持するわれわれ個人に反対するものだ。内閣に代つて、われわれ自身がその反対勢力に打突つて行かうと云ふ氣勢を見る。其処に政治が国民自身のものになって、所謂強力政治が行はれ得るのである。……国家多事にして、日本に強力な政府を樹立して国

家を安全な彼岸に達せしめる必要がまして来た。然るに内閣組織者を推薦すべき政界上層部は唯有力なる個人とか、各方面に折合ひのよき政治家を求めて、それが幾許の国民的支持を得るかを問はなかつた。

強力なる内閣を作らんとして、実はその目的に逆行して、日本の政治を寡頭政治に墮落せしめたのである。何故に時勢がかうした傾向を採るに至つたかの原因は当時日本の一風潮となつた革新イデオロギーにある。五・一五事件、二・二六事件の被告の陳述を見れば思ひ半ばに過ぎる。この二つの事件のために、わが政治家は常識と勇氣を失つた。

……議会政治の目的は政府と国民との協力に依る政治を樹立することにある。その結論は政党内閣になる。革新イデオロギーが政党内閣を中絶せしめて、日本に寡頭政治に似たる制度を招来した。ここに革新イデオロギーの矛盾がある。革新イデオロギーの陣営からしきりに強力内閣の要求が出る。然るに国民の協力を得ざる政府に何の強力を期待し得られやうぞ。国民の大多数がこれぞ我党内閣だとして支持する所に最も強力な政府が存在するのである。⁽⁵³⁾

戦時色が濃くなり、国家総動員の掛け声と言論統制が強まる中で、馬場の政治的理性はこのように冴えわたつていた。日中戦争の泥沼化からの脱出と対米危機の克服の道は、当時の下剋上と分裂の風潮に悩まされた戦争指導と外交すなわち国策の強力な統一のほかなかつた。近衛らはそれを「新体制」という新しい全体性の神話によりはかろうとしたが、馬場はあくまで政党政治・議会政治という開かれた政治原

理による打開を主張したのである。

しかし、肝心な政党自身が無産政党も含めて、バスに乗り遅れるなと近衛新体制に駆け寄り、解党してしまった。国家を安全の彼岸に達せしめる政治的理性（馬場はこれを政党対立と言論自由という開かれた原理による国民意思形成に求めた）に道を閉ざしてしまったのである。馬場は失望の色を隠さない。

「今日政党は明白ならざる事情のもとに、自ら解党を急いで消滅して行く。それは新政治体制のためか、あらず。寧ろそれは政党が無力になつて、生きる力がなくなつたからだと見る方が妥当であらう。政党が無力になつた原因はいろいろあるであらうが、日本人には未だ官尊民卑の思想が抜け切らず、滔々として権勢に阿附するものが現れて来る。若し今日の政党が政党勃興期におけるごとく、徒手空拳にして、しかも天下を呑む程の気概があつたならば、風声鶴唳に驚いて、自己を解消するやうなことはなかつたであらう。自ら立つ力がないから、風がなくなるとも倒れる⁽⁵⁴⁾」。

以降の日本国家の迷走と悲劇はいわずもがなである。

四、おわりに

われわれは、コモンセンスの自由主義がいかに力強い政治評論を生

みだせるものであるか、馬場の同時代批判を通して知ることができたことに挙国一致内閣とそのイデオロギーへの批判は、自由主義の開かれた精神を日常用語で簡明に主張したものであった。そしてそれは、近代日本の政治精神の最も重大な問題とみるべき全体性の神話に挑戦するものであった。個と対立（制度的には政党と議会に象徴されよう）を全体（国家）と一致の名により断罪する政治精神は、国体、超然主義、挙国一致といったイデオロギーとして近代日本の政治理性を脆弱なものたらしめていた。馬場はそれに挑戦した。精神的に見た馬場の本領はそこにあつたといえよう。

しかし、馬場の自由主義は時代の現実の壁を打ち破る力をもちえなかつた。この点に關し、青野季吉は「馬場の『正論』が通らないやうな、政治上、社会上の時代相貌がどつきり蔽ひかぶさつてゐるところから、馬場のリベラルな政治詩が、ちやうど度合のいさ晴らしとして、当座の抗議として、人々をとらへるのだ」と皮肉な見方をしている⁽⁵⁵⁾。しかし歴史的限界はいささかも精神的価値を減ずるものではない。

本稿は馬場の思想活動の最も盛んであつた憲政常道時代から挙国一致内閣時代にかけての評論を検討した。馬場の思想形成、大正期の新聞（ジャパントゥタイムズ、国民新聞）記者時代の活動、戦後の馬場等考察すべき課題は残っているが、それについては稿を改めたい。

(1) 馬場の評伝としては岩淵辰雄「馬場恒吾」(「三代言論人集」8

〈時事通信社、昭和三八年〉所収)があるが、本格的な政治学的研究書や論文は目にしない。

- (2) 馬場は第二次憲政擁護運動(一九二四)後にフリーのジャーナリストとなるが、その前はジャパントイムス(明治三三年七月から途中英文雑誌オリエンタル・レビュー編集長時代(明治四二年七月〜大正二年二月)をはさんで大正三年七月まで)、国民新聞(大正三年八月〜大正一三年二月)の記者であった(同右書「馬場恒吾年譜」参照)。

- (3) 中村菊男「宰相の条件」(PHP研究所、一九七六年)一七〇頁。
 (4) 青野季吉「馬場恒吾論」(『日本評論』第一〇巻第一二号(昭和一〇年二月))。

- (5) 馬場恒吾「議会制度改革論」(青雲閣書房、昭和三年)七頁。

- (6) 馬場の普選への余りの熱心さに国民新聞社長の徳富蘇峰は「普選が行なわれなかったら、馬場さんは気狂いになるか、自分でテロでもやりかねませんね」とからかったという(前掲「馬場恒吾」(前掲『三代言論人集』8所収二五七頁)。第四二議会下の普選運動においてジャーナリズムにあつては「東京方面では馬場恒吾を編輯局長とする『国民新聞』がもつとも熱心」だったという(松尾尊允「第一次大戦後の普選運動」(井上清編「大正期の政治と社会」(岩波書店、一九六九年)所収一七九頁)。
 (7) 馬場恒吾「浜口雄幸論」(『中央公論』第四二年七月号(昭和二年七月))。

- (8) 原敬については馬場恒吾「現代人物評論」(中央公論社、昭和五年)三五頁、一一二頁、星亨については同右書一〇七〜一〇九頁を参照。板垣、高橋、犬養の他に、大隈、伊藤、桂も金が原因で落莫たる末路をたどったと馬場はみていた(馬場恒吾「没落期の政党政治」(『中央公論』第四二年五月号(昭和二年五月))。

- (9) 前掲「浜口雄幸論」。
 (10) 前掲「没落期の政党政治」。

- (11) 前掲「馬場恒吾」(前掲『三代言論人集』8所収二五五頁参照)。

- (12) 馬場恒吾「政界人物風景」(中央公論社、昭和六年)五六頁参照。

- (13) 前掲「浜口雄幸論」。

- (14) 馬場恒吾「安達謙蔵論」(『中央公論』第四三年二月号(昭和三年二月))。

- (15) 前掲「現代人物評論」四一〇頁。

- (16) 前掲「議会制度改革論」二〇〜三三頁。

- (17) 馬場恒吾「普選前衛戦と無産政党」(『中央公論』第四二年九月号(昭和二年九月))。

- (18) 前掲「議会制度改革論」四八頁。

- (19) 同右書一二七〜一二八頁。

- (20) 馬場恒吾「立上がる政治家」(『中央公論社』昭和二年)二五

- 一〜二五四頁。

- (21) 前掲「没落期の政党政治」。

- (22) 前掲『現代人物評論』一四四頁。
- (23) 同右書一四四頁。
- (24) 馬場恒吾「新党新党ならず」(『中央公論』第四二年六月号(昭和二年六月))。
- (25) 同右論文。
- (26) 同右論文。
- (27) 馬場恒吾『国民政治読本』(『中央公論社』、昭和十一年)五頁。
- (28) 前掲『現代人物評論』一〇一頁。
- (29) 同右書七八頁。
- (30) 前掲「没落期の政党政治」。
- (31) 詳しくは升味準之輔『日本政党史論』第六卷(東京大学出版会、一九八〇年)一五六頁以下参照。
- (32) 馬場恒吾『議会議改論』(『中央公論社』、昭和八年)二一〇～二一四頁。
- (33) 前掲『日本政党史論』第六卷一九二～一九七及二二〇～二二八頁に齊藤、岡田内閣下の政民提携あるいは合同の動きが精密に描かれている。
- (34) 前掲『議会議改論』二八一～二八二頁。
- (35) 同右書二八〇、三二三頁。
- (36) 同右書二八九～二九〇頁。
- (37) 馬場恒吾「挙国一致内閣の清算」(『改造』第一七卷第三号(昭和十一年三月))、馬場恒吾「政党復興の時機」(『改造』第一七卷第四号(昭和十一年四月))参照。
- (38) 前掲「政党復興の時機」。
- (39) 前掲『議会議改論』二九八頁。
- (40) 同右書三〇一頁。
- (41) 前掲「挙国一致内閣の清算」。
- (42) 馬場恒吾「ファッショと政党」(『改造』第一七卷第五号(昭和十一年五月))。この論文で馬場は「ファッショ克服の道は議會解散が最も有効」とし、その理由を「総選挙になると、政黨員は別人の如くなる。其所に初めてかれらの奮闘力が發揮される。……其所にかれらは闘争の快味を覚え、そしてかれらの闘争心が燃え上る。新たに出て来る代議士は最早代議士の死骸でなくして、闘志旺盛な生きた代議士である。それが議政政治を復活せしめる」と述べている。
- (43) 馬場恒吾『政界人物評論』(『中央公論社』、昭和十一年)二二二頁。
- (44) 同右書二四、四五頁。
- (45) 同右書四〇頁。
- (46) 前掲『国民政治読本』五四頁。
- (47) 前掲『政界人物評論』一三頁。
- (48) 前掲『国民政治読本』二二八～二二九頁。
- (49) 前掲「挙国一致内閣の清算」。
- (50) 同右論文。
- (51) 内閣審議会・調査会を次のように馬場はみた。「所るで此会の内

容は合法ファッショの具体化したものである。……国策を議会以外の調査会に於て立案し、審議会で審議し内閣をしてそれを実行せしめる。此制度の下にあつては議会は何の爲めに存在するか、蓋し議会は将来に於ても、現在に於けるが如く国政に関する議事を進めるであらう。だが国政に対する其重要さは甚だしく削減される。少くとも議会と重複する仕事をする他の機関と並び立つことを忍ばなければならぬ。或る時機になれば内閣審議会と調査局があれば、議会の存在が不必要だと言ふものが出るであらう」(前掲「ファッショと政党」)。「調査局の方は軍部の有する政治上の革新意見に合法的な発言権を与へた点に於て、相当の意義あるものと言つてもよい」(馬場恒吾「軍部の政治的圧力」△「改造」第一七卷第九号(昭和一〇年九月))。

(52) 馬場は広田内閣の政党出身大臣が「政党内閣成立を不可能ならしめる如き官制改革に文句なしに賛成した」とその常識を疑つた(前掲「立上る政治家」一三三頁)。

(53) 馬場恒吾『時代と人物』(東洋経済新報社、昭和一五年)一七〇頁一七四頁。

(54) 同右書九九頁。

(55) 前掲「馬場恒吾論」。